

2014 年 研究旅行奨励制度

「朝鮮出兵から探る日本観・朝鮮観の形成」



17AR158 秋山 菜誉美

## -目的地-

佐賀県(名護屋)、長崎県(対馬)、韓国(釜山、晋州、順天、泗川、蔚山、ソウル)

## -研究旅行の目的-

現在、竹島や従軍慰安婦など数多くの問題が浮き彫りとなり、一時、良好であった日韓関係が再び冷え込んでいる。この日韓関係を悪化させている要因の大部分は韓国側から見れば、日本統治時代の朝鮮半島の植民地支配であると思われるが、さらに時代を遡ると、秀吉の朝鮮出兵に行きつく。朝鮮出兵は日本の歴史の中でも大変重要な出来事であり、本や雑誌、テレビなどで様々に取り上げられている。しかし、それらは日本人の視点から捉えたものが大半を占めており、日本では秀吉が悪く書かれているものの方が少なく、英雄的に扱っているものもある。一方、韓国では豊臣秀吉と言うと伊藤博文につぐ二番目に嫌いな日本人であり、犯罪者としてのイメージが強いのが実状である。これほどまでに両国の秀吉に対する認識が違うことに驚く。

そこで、今の日韓関係を歴史的視点から理解するヒントを探す上で、韓国における日本観を調査するためには倭城を中心として回ることが重要であると考えた。その際、朝鮮出兵をそれぞれの視点からどのように人々に伝えられているのか、研究されているのかを理解するため、博物館で直に調べてみることも必要不可欠である。そこから朝鮮出兵における日本と韓国の歴史認識の違いや朝鮮出兵が朝鮮に与えた影響を感じる事が出来るからである。日本の朝鮮観については、出兵の拠点である唐津の名護屋城など日本における朝鮮出兵に関する場所へ行き、改めて日本からの視点で見ることも行いたい。

さらに、古くから朝鮮との交流が盛んに行われ、友好関係にあったにも関わらず、朝鮮出兵では朝鮮側の使者に対し日本への服従要求交渉を行ったり、先鋒を務めたりと大きな役割を果たした対馬は果たして本土と同じ考え方を持っていたのか、疑問に感じたため、対馬や藩主宗氏についても焦点を当てることにする。

## -日程-

	滞在地	行動内容
8月23日	名護屋	・佐賀県立名護屋城博物館 ・名護屋城跡
8月24日	対馬	・厳原八幡宮神社 ・清水山城跡 ・金石城跡、旧金石城庭園 ・万松院 ・長崎県立対馬歴史民俗資料館

8月28日	福岡→釜山	<ul style="list-style-type: none"> <li>釜山博物館</li> <li>子城台倭城</li> </ul>
8月29日	晋州 一日目	<ul style="list-style-type: none"> <li>韓国国立晋州博物館</li> <li>晋州城</li> </ul>
8月30日	晋州 二日目 (順天・泗川)	<ul style="list-style-type: none"> <li>順天倭城</li> <li>船津里城(泗川倭城)</li> </ul>
8月31日	釜山	<ul style="list-style-type: none"> <li>釜山倭城</li> <li>東萊邑城壬辰倭乱歴史館</li> </ul>
9月1日	蔚山	<ul style="list-style-type: none"> <li>西生浦倭城</li> <li>蔚山倭城</li> </ul>
9月2日	ソウル	<ul style="list-style-type: none"> <li>李舜臣記念館</li> <li>韓国国立中央博物館</li> </ul>
9月3日	ソウル(仁川)→福岡	帰国

## -研究報告-

### 1. はじめに

朝鮮出兵は、韓国では壬辰倭乱（イムジンウェラン）と呼ばれており、（韓国での調査報告は以下壬辰倭乱と表記する）1592年から1598年にかけて日本と朝鮮の間で起きた戦争である。日本では文禄・慶長の役とも言う。文禄の役では、明征服を目的にその足掛かりとして朝鮮に攻め入ったが、慶長の役では、一転朝鮮半島南部周辺域の支配へと目的を転換していった。400年以上経った現在でも韓国にはその爪痕が深く残っている。

他方、日本では朝鮮出兵という出来事は、秀吉を讃えた『絵本太閤記』が江戸時代初期に出版されるなど、朝鮮出兵を賛美する傾向があったが、江戸幕府は秀吉の人気が出ることをよく思わなかったため、朝鮮出兵を悪として捉えるようになっていく。これが明治になると軍国主義国家になるのに合わせて再び秀吉賛美へと転換するのである。このように、国の違いだけでなく、時代の流れにおいても朝鮮出兵は様々に捉えられてきた。

このような関心から朝鮮出兵が現在の日本と韓国に、また両国の関係にどのような影響を与えているのか、どのような形で残っているのか、そこから何を導くことが出来るのかを直に触れ、それを踏まえてこれからの日韓関係について考えていきたい。

## 2. 日本から見た朝鮮観

### 1. 名護屋

名護屋は朝鮮出兵の際、出陣拠点となった地で、ここに当時では驚くほど巨大で華やかな名護屋城が築かれ、各地から集められた武将を次々に驚かせたとされている。

現在、名護屋城跡地の一部に名護屋城博物館が建てられているが、事前にアポイントメントを取っていた学芸員の方に展示品の説明やお話を伺った。

名護屋城博物館は、日本で数少ない朝鮮出兵に関する展示を行っている大変貴重な博物館であるが、建設当初は、韓国から反対の声があった。そこで日韓交流を目的とした展示を行うということを知事自ら説明のため、韓国に渡るなどの苦労を重ねて開館にまでこぎつけたそうである。



▲名護屋城博物館入口



▲高麗渡海陣立書

高麗渡海陣立書は朝鮮に攻め入るための準備として、文禄の役が始まるひと月前に、渡海軍の輸送を統括する船奉行を置いたことを示す資料である。

博物館内の展示は、主に四つの時代に分けられており、その一つが朝鮮出兵に関する展示であった。展示品は、名護屋城周辺の各武将の陣配置が分かる絵図や早川長政鼻受取状といった日本側の資料と李舜臣忠武公全書などの朝鮮側の資料が7:3くらいの割合で展示されていた。

博物館のすぐ後ろには、秀吉の甥である木下延俊の陣跡があるなど、周辺には、全国から集められた名だたる武将たちの陣跡が数多く残っていた。



▲石垣

石垣は角が落されていた。江戸時代に落とされ、この城はもう使わないということを示すためであった。



▲天守閣跡

天守閣があったとされる場所。一年に数回天気の良い日はここから対馬まで見えることもある。

## 2. 対馬

朝から生憎の雨で、清水山城跡は本丸まで行く予定だったが、山を登るのは危険だったため、三の丸まで行くことにした。晴れている日は、ここから釜山が見える。



▲三の丸から町を見下ろす景色

清水山城は、朝鮮出兵直前の 1591 年に秀吉によって築かれた城で、肥前の名護屋から上対馬の撃方山を結ぶ兵站線<sup>i</sup>の駅城でもある。

実際に登ると、想像以上に道が急斜面で荒く、当時は人の手だけで城を作ったのだから、相当な労力を費やしたに違いない。改めて当時の築城の苦労を実感した。



▲大手の櫓門

旧金石城庭園▲

次に金石城跡・旧金石城庭園に向かった。金石城は対馬宗氏の居城で、1528 年の内乱で元の居城であった「池の館」が焼失してしまったことで、清水山の麓、島分寺があったとされるここ金石に居城を移した。



▲百雁木(万松院)

この階段を登った先に宗氏一族のお墓があった。



▲厳原八幡宮神社入口

対馬藩初代藩主の宗義智に嫁いだ小西行長の娘マリアを祀っていた。この結婚は朝鮮出兵を見据えた秀吉が宗義智との関係を強固なものとする狙いがあった。

最後に向かった長崎県立対馬歴史民俗資料館でも、学芸員の方にお話を伺うことが出来た。宗氏は朝鮮出兵に際し、秀吉から先鋒になるようにとの命が下った。その理由として宗氏及び対馬の人々は古くから朝鮮と交易をしていたため、半島内の道に詳しかったことが挙げられる。しかし、対馬の人々の多くは朝鮮との間で戦が起きると、交易が途絶え、生活が立ち行かなくなることを危惧し、反対の声は凄まじかった。結果、朝鮮出兵の間は国交が途絶えてしまい、多くの人々が貧しい生活を強いられた。



▲長崎県立対馬歴史民俗資料館入口

対馬が過去においてそうであったように現在においてもまた日韓友好の懸け橋となるのではないかと感じた。

当時の日本人の朝鮮観は、本土と対馬では大きく異なっていた。秀吉は当初、明を征服するための足掛かりとして朝鮮に攻め入っていることから、明征服への道としてしか考えていなかった。しかし、対馬は朝鮮に対して友好的な立場を取っていたのである。当時の対馬と朝鮮の交流を考えれば、継続的な商関係、文化交流が互いの理解と友好にきわめて重要な役割を果たしている。今回の調査で実感したことは、

---

i 本国と戦場を繋ぐ輸送連絡路

### 3. 韓国から見た日本観

#### 1. 釜山

初めに釜山を訪れた。ここ釜山は、文禄の役で小西行長・宗義智率いる第一軍が陰暦 4 月 14 日に釜山鎮城を攻め落とし、壬辰倭乱（イムジンウェラン）の口火が切って落とされた場所である。



▲釜山博物館正面

釜山博物館は、釜山での戦いの再現模型や絵図のほか、朝鮮征伐行軍図や絵本朝鮮征伐記、国宝である壬辰状草(イムジンチャンチョ)が展示されていた。壬辰状草は李舜臣が 1594 年に三道水軍統制使<sup>i</sup>を務めていた時までの出戦経過や日本軍の状況、軍事上の権利事項をまとめた資料である。壬辰倭乱は朝鮮通信使と共に韓日関係室で展示されており、韓国側から見た壬辰倭乱の貴重な資料

が数多くあった。また、館内は日本語のパンフレットが置かれ、少しだが日本語の案内表示や、日本語を話せるスタッフが常駐していた。日本人も多く訪れていることが分かる。

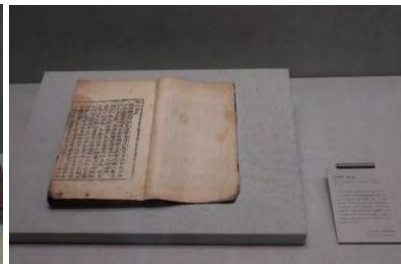


▲釜山鎮城攻防戦図



▲れつじょくんそんのほこら(読み)

文禄の役の最中、東萊府使である宋象賢の元に官服を届けに行く際、日本軍に捕まった人(詳細不明)を追討するために作られたもの。



▲懲愆録(ちょうびろく)

懲愆録は過去の過ちを鏡にするという意味で、釜山鎮城落城からソウルへの進撃など壬辰倭乱に関して記されている。著者は柳成龍<sup>ii</sup>である。

釜山博物館の最も近くに位置する釜山鎮城は、朝鮮出兵最初の戦場となった地であり、母城(釜山倭城)と子城(子城台倭城)に別れ、線路を挟んでちょうど反対側に位置している。

～釜山倭城～



<左写真>釜山倭城(現在: 甌山公園)の入口

<右写真>石垣の積み直し

日本軍は釜山鎮城を落とした後、漢城へと向かう上で、東萊邑城は漢城へ通じる主要道を押さえる要地であったことから攻撃した。東萊邑城に関する資料を展示しているのが壬辰倭乱歴史館で、地下鉄寿安駅構内に位置している。



▲歴史館入口



東萊邑城の再現模型▲

2005年に釜山交通公社が当駅建設の際、東萊邑城の堀が発見されて以降、次々に武器等が出土し、壬辰倭乱の悲惨さを忘れないため、この歴史館が建設されたとのことであった。入ってすぐのところに東萊邑城の再現模型があり、東萊邑城の戦いをアニメ化した映像も流れていた。ここの説明文を読んでみると「侵略戦争」という言葉が何度も出てきた。当時の惨劇を忘れないために敢えてこの言葉を使っているのかもしれないと思った。また当時の朝鮮軍は日本軍が使う「火縄銃」に大きな衝撃を受けたことが読み取れた。

右写真の東萊邑城の戦いを描いた屏風は一見すると、戦いの様子を描いているだけのように見えるが、ここから様々な物語を読み取ることが出来る。

以下、写真説明。

(南門付近)「戦うなら戦え、そうでなければ、道をあけよ」と書いた日本軍の板に対し、東萊府使の宋象賢は「戦って死ぬは易く、道を開けるは難し」と書いた板を返した。

(左上)左兵使の李が日本軍の数に恐れをなし、部下数名を連れて逃亡している。

(中央)死を覚悟した宋象賢が、漢城の方を向いて王にお辞儀をしている。

(下中央)東萊の百姓である金祥とその妻、娘が瓦を投げて必死に抗戦している。



▲東萊府殉節図

この屏風は釜山博物館や晋州博物館にも目立つ位置に展示されており、朝鮮出兵に関する韓国側の重要な資料であると言える。

展示品の中で最も印象的だったのが、左の写真である。発掘当時の様子がそのまま展示されており、人骨があるのも見て取れる。様々な記述からも東萊邑城の戦いの被害は大きく、村人の殆どが戦死した。この惨劇は両国が忘れてはいけない歴史だと痛感した。



▲発掘された当時の様子

当時の朝鮮の城は日本の城とは様相が異なり、城内には宮廷といった行政機関だけでなく、一般市民が数多く住んでいた。城そのものが一つの居住空間となっていたため、被害が甚大であった。

現在、釜山倭城の本丸にはバスケットコートがあり、子どもの遊び場になっていた。石垣の積み直しが至る所で見られ、当時のものと現在のものが半々の割合で残っていた。

～子城台倭城～



▲西門城郭



▲西門城郭の隅にあった二つの石柱

子城台倭城も公園化されており天守閣は残っていないが、城内の道がそのままトレッキングコースとして舗装されていた。

子城台倭城は、慶長の役の際、毛利輝元によって築城され、小西行長が指揮を執った。どんな役割を担っていたのか明確ではないが、日本軍撤退後は朝鮮水軍の拠点として用いられた。公園内には、壬辰倭乱の際に朝鮮を支援した明の将師を讃えた千將軍記念碑などがある。

この石柱は復元された西門の両端にあり、壬辰倭乱の後、釜山鎮支城を築城した際に建てられたものと推定されている。石柱に書かれた左写真の「西門鎖論」、右写真の「南徼咽喉」には、「ここは国の喉元に当たる南の国境であるため、西門は国の掟のようなものである」という意味がある。

これは、壬辰倭乱の後、日本への警戒心が強かった時代の考え方を反映していると言える。

## 2. ソウル

東萊を攻略した日本軍は4月25日には尚州を、4月28日には忠州を攻め落とし、開戦よりわずか20日足らずで漢城まで攻め上り、首都漢城を攻め落とした。漢城があった場所は現在のソウルであり、ソウル特別市に李舜臣記念館と韓国国立中央博物館がある。

李舜臣記念館は、世宗文化会館の地下二階にあった。階段を降りると、入口付近に様々な李舜臣の絵があり圧倒された。主に、李舜臣の幼少期から露梁海戦で戦死するまでの生涯が展示、紹介されており、武官としての李舜臣とはまた違った側面を見ることが出来た。

李舜臣は朝鮮出兵の前年に、右議政の地位に就いていた幼馴染みでもある柳成龍の推薦で全羅左水使となり、開戦後、玉浦海戦に始まり釜山浦海戦までの十回の海戦すべてにおいて勝利を収めた。その中には三大捷として有名な閑山島海戦も含まれる。また、日本軍の補給物資の運搬経路を絶つなど策士でもあり、日本軍に大きな打撃を与えた。しかし、壬辰倭乱最後で最大の海戦、露梁海戦で戦死したとされている。



▲科擧の合格証書

数々の海戦で勝利を収めた李舜臣だが、意外にも科擧に何度も落ちており、ようやく 32 歳の時に受かったという。他にも、『李舜臣行録』にみられる有名な亀甲船の巨大再現模型や亀甲船の構造を詳しく説明しているコーナーがあった。李舜臣の栄誉を讃えた資料館ということもあり、日本について良く書かれているものは少なく、ゲームコーナーには、画面に日本軍の船の映像が写し出され、それを鉄砲で撃ち落とすなどのゲームがあった。李舜臣が自ら記した乱中日記の内容

が読める映像もあり、大変充実した資料館であった。

また、日露戦争で活躍した海軍元帥東郷平八郎が、「自分は李舜臣の足元にも遠く及ばない」と言ったという逸話が出来るほど、李舜臣は敵将でありながら当時の日本人の心に大きな印象を与え、後の日本人にまで影響を与えている。



▲李舜臣記念館入口の壁



▲亀甲船の巨大再現模型

韓国国立中央博物館は、韓国で最も大きな博物館であり、ここで朝鮮出兵がどの程度扱われているのかを検証するために訪れた。



▲乱中日記

李舜臣が自ら記したとされる乱中日記は、水軍統制に関する軍事上の秘策や戦況報告書の草案が記録されており、壬辰倭乱の戦況や当時の朝鮮の軍事制度を詳しく知ることが出来る貴重な資料である。

隣には当時の朝鮮軍の武器が展示されていたが、展示品はその二点のみで思ったよりも扱われていなかった。

### 3. 晋州

晋州城は、壬辰倭乱の戦いの中でも壮絶な戦いが繰り広げられた場所で、民間人を含む数多くの人々が命を落とした。晋州城攻防戦は文禄の役に第一次(1592年10月4~10日)、慶長の役に第二次(1593年6月21~29日)と二度に渡り行われ、第一次晋州城攻防戦の折には、晋州牧使である金時敏が指揮を執り、細川忠興ら約二万の日本軍をたった三千足らずで撃退した。この出来事は三大大捷<sup>iii</sup>の一つとし



▲晋州城門(復元)

て韓国ではかなり有名で、この戦いで命を落とした金時敏將軍は英雄として晋州城内に像が建てられるなど、韓国で今なお語り継がれている。

城内にある晋州博物館は、館内二階に壬辰倭乱に関する資料が展示されていた。名護屋城博物館から紹介して頂いた学芸員の方にお話しを伺ったところ、元々この博物館は、伽耶文化を中心に展示していたが、地元の方達の要求により、リニューアルオープンし、壬辰倭乱専門の博物館になった。現在は、この地域の歴史についても展示するようになり、今ではおよそ半々の割合になっている。

展示品は、有名な亀甲船の模型から僧義兵の四溟大師<sup>iv</sup>や権應銖<sup>v</sup>の肖像画、日本の虜になっていた朝鮮人を取り返したことが書かれている文、李舜臣直筆の文などの貴重な資料まで展示されていた。甲冑や安宅船といった日本側の資料も比較のため展示されていたが、主に、朝鮮側の活躍に関する資料が多く見られた。



▲当時の晋州城を再現した模型



右図の赤枠が全体の大きさ、橙枠が現在の晋州城の大きさで、現在の晋州城の面積は当時の約半分である。



▲日本の教科書

また、展示品の中に日本の歴史の教科書があった。韓国人達が日本ではどのように学ばれているのかを比較するためとのことだったので、逆に韓国の教科書はどのように書かれているのか伺うと、1~2ページほどで簡単にしか書かれていないとの答えが返ってきた。しかし、李舜臣はも

ちろんのこと、日本ではほとんど習うことのない義兵を個人名で習うなど、韓国人にとって壬辰倭乱=李舜臣、義兵のイメージが強いことを再認識した。

#### ～晋州城～



▲金時敏

晋州城内には他にも、巨大な金時敏像や論介(ノンゲ)にまつわる遺構がある。晋州牧使であった金時敏は、第一次晋州城攻防戦において様々戦術を駆使し、日本軍を攪乱させた。女人にも男服を着せ、あたかも大軍であるかのように見せかけた作戦は、見事に成功し、『太閤記』にも数万の朝鮮軍が立て籠もる城と記されている。その

高度な戦術と勇猛果敢な戦いぶりは当時の日本人を大いに驚かせ、江戸時代、歌舞伎の題材にもなっているほどである。

妓生(芸者)であった論介は、晋州城を占領した日本軍が、その夜開いた宴会で酒に酔った倭将(毛谷村六助とされる)を誘い出し、倭将を道ずれに南江(※表紙写真)に身を投じた  
とされる人物である。この論介の話は、日本では殆ど知られていないが、韓国では論介殉  
国の話として、教科書にも載っている。



▲義岩

妓生の論介(ノンゲ)が加藤清正の家臣であ  
った毛谷村六助を道連れに身を投げた岩で  
あると言われている。



▲義妓祠

論介の精神<sup>vi</sup>を称えるために建てられた  
ものである。

#### 4. 蔚山

西生浦倭城は、壬辰倭乱(文禄の役)の最中に東部戦線の総指揮官に任命された加藤清正  
が、その駐屯居城とするため築いた城である。また、ここは四溟大師が四回に渡って終戦  
交渉をした場所でもあり、壬辰倭乱後、1895年に至るまでの約300年間、朝鮮水軍の兵営  
として使われた。

順天倭城同様、保存状態が良く、当時の様子を想像しやすい遺構であった。入口付近に  
日本語を話せる方が常駐している案内所があり、本丸跡にも管理小屋のような建物が建っ  
ていた。そこで記帳ノートを見つけた。日本人観光客が多く訪れるとのことだったが、韓  
国人の名前が殆どで倭城を評価する言葉が多く見られた。また、西生浦倭城は石垣のすぐ  
そばまで民家や畑があり、人々の生活空間の一部になっていた。

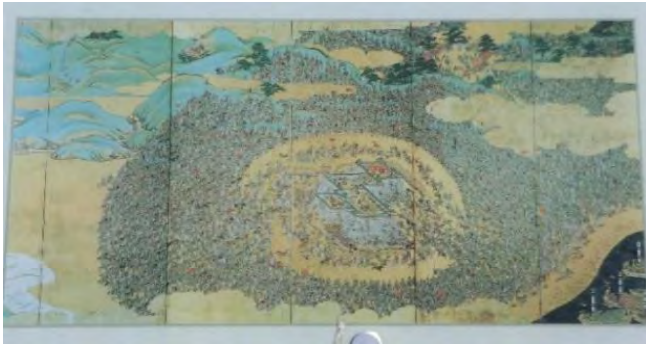


▲西生浦倭城の案内板



管理小屋▲

▲本丸から見下ろす景色



▲蔚山籠城戦図

蔚山籠城戦は慶長の役で最も壮絶な戦いだったと言われ、1597年加藤清正が蔚山倭城の城郭築城の最中に朝鮮・明連合軍が総攻撃を仕掛け、日本軍は城内に立て籠もり、援軍を待った。その期間、城内の生活は食糧不足に伴い、馬を食べる<sup>vii</sup>など凄まじいものであった。

蔚山倭城も現在は公園になっていたが、本丸、二の丸、三の丸の場所ははっきりと確認でき、当時を想起させる外城の土塁跡などの遺構も残っていた。



## 5. 順天・泗川



▲征倭紀功図

明軍に従軍していた画家が丁酉再乱の最後の三カ月間に渡る陸海での戦闘を描いたものである。

全羅南道に位置する順天倭城は1597年小西行長率いる日本軍が京畿道周辺における戦闘で敗退し、南下した際に再侵略に備えて築かれた城である。その後、露梁海戦<sup>viii</sup>に至る最後で最大の戦いがこの地で行われた。

また、この倭城は26ある倭城の中で最も西に位置し、義兵の抵抗が激しかった地であるにも関わらず、保存状態が良く、残されている石垣や天守閣跡から当時の倭城の規模を実感することが出来る。本丸には多くの松の木が立っており、日本の風景が感じられた。

天守閣跡からの眺めは、一面海が広がり、ここから露梁海戦が行われた地を見ることは出来なかったが、写真の遥か向こうがその地である。

現在、倭城の傍らには私有の畑があり、バス停名が「ウェソン(倭城)」であるなど、観光地として人々の生活空間に溶け込んでいた。



▲石垣

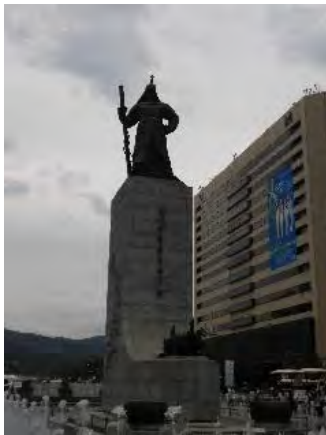


▲船津里公園入口

泗川倭城は、船津里の北の低い丘に位置する。朝鮮侵攻に際し、1597年に島津義弘を始め11人の武将によって建てられた日本式の要塞である。別名船津里城と呼ばれている。現地では船津里城の名が主流なようでタクシー運転手の方に泗川倭城と言っても分かってもらえなかった。実際に訪れてみると、公園化がかなり進んでおり、残っている遺構も少なかったが、春になると桜祭りが行われる隠れた桜の名所でもあった。日本の象徴とも言える桜は、昔ここに倭城が建ち多くの日本人がいたことの名残であろう。

## 6. 李舜臣の像

調査の途中、様々な場所で李舜臣の像と出会った。



▲光化門広場にある李舜臣像



▲釜山倭城裏側にある李舜臣像

ここから考察するに、韓国における李舜臣という存在は、日本における秀吉という存在よりも遥かに人々の心に根付いており、讃えられているのだと感じられた。

- 
- i 朝鮮南部の慶尚道・全羅道・忠清道の三道の水軍を統べる指揮官。
  - ii 李氏朝鮮の国王宣祖に仕えた宰相。
  - iii 壬辰倭乱における朝鮮軍の三大勝利を指す言葉。
  - iv 僧義兵の総指揮官。
  - v 慶尚道左防御使。
  - vi 自分の身を犠牲にして国のために殉じた精神。
  - vii 蔚山倭城の本丸跡の石碑には、「倭軍敗れ、城内に退入。食糧不足で尿を飲み、馬を食べた」と記されている。
  - viii 1598年1月19日に起きた海戦。この戦いで李舜臣は戦死。

## 4. まとめ

今回、韓国での調査のため、多くの博物館を訪れたが、そこで様々な秀吉の肖像画を目にした。私はそれらの肖像画に違和感を覚えた。日本で豊臣秀吉というと皆が皆思い浮かべるのは、狩野光信が描いたとされる豊臣秀吉像(右図)だろう。しかし、韓国で見た豊臣秀吉の肖像画(右下図)は、この写真から覗わせる貫禄や威厳とは程遠く、弱々しい印象を受ける。当時の朝鮮人の殆どは実際に秀吉を見ていない。恐らく、朝鮮出兵は日本の敗退という形で終わったため、負けた側の将軍である秀吉をこのように描いたのではないか。また、博物館には、必ずと言っていいほど東萊府殉節図が展示されていることに気付いた。朝鮮出兵全体から見れば、一つの戦いにすぎないが、そこで起きた様々な出来事が朝鮮半島の歴史を韓国人がどのように捉えているのかを示す大変重要な資料である。日本では一般的に知られていない論介と呼ばれる妓生の存在や東萊城の戦いで討ち死した宋象賢、第一次晋州城攻防戦で日本軍を撃退した金時敏も大きく取りあげられているが、彼らに共通しているのが、王に殉じる精神である。王のために自らの身を犠牲にする精神は、時代を超えて韓国の人々の心を打ってきたのだろう。



▲豊臣秀吉像(高台寺蔵)



▲豊臣秀吉像(釜山博物館)

## 5. おわりに

日本と韓国は、古く三国時代から今に至るまで交流が行われ、お互いの歴史、文化にも様々な影響を及ぼし合ってきた。日本にとって韓国は、地理的に最も近い国であり、外交上も重要な隣国である。今回、韓国で調査する上で、最も重きを置いていたのが倭城であった。倭城は、朝鮮出兵の史跡として扱われていないものもあったが、全て倭城の原型は残されており、朝鮮出兵の惨劇を想起させる遺構であるとともに、朝鮮出兵の歴史を今日まで伝えてきた証でもあるということ強く実感した。韓国での朝鮮出兵の見方は、主観的であり、侵略戦争という見方が少なからずあった。それは、実際に自分たちが住んでいる場所が戦地となり、そこで多くの朝鮮人が亡くなったという憎悪が時代を超えて引き継がれてきたからにちがいない。

しかし、一方で日本側の見方は、中立的で客観的なものが多く、対馬では、朝鮮出兵に関する遺構、遺物が殆ど見られなかった。代わりに、朝鮮通信使に関するものが大半を占めていた。当時の対馬の人々の多くは、朝鮮出兵に反対であったためか、朝鮮出兵という出来事の記憶が徐々に薄れていっていると感じた。

先日、新聞を読んでいると、こんな記事を目にした。「〈大邱の恩人〉後世に。」日本統治時代に大邱に渡り、干ばつに苦しむ土地の改良に一生を捧げた水崎林太郎氏の功績を日本人にも知ってもらいたいとのことで韓国の市民団体が現在、大邱の地に記念館建設を企画している。毎年、追悼式が行われているほど、水崎林太郎氏はその土地の人から長く慕われ続けているのである。その記事には大邱から韓日の交流を呼びかけたいとあった。日韓関係は、あまり良くない過去も多いが、決してそれだけが歴史を築いてきたわけではなく、大邱での良い出来事もまた日韓の歴史である。

現在の日韓関係において、未だ数多くの問題があるが、最も悪いことは実際にあった出来事を忘れていくことである。今回、渡韓するまでは、倭城は重要な歴史的遺構として保

存されていると考えていたが、実際に訪れてみると、歴史的遺構というよりは、観光地や公園という市民の憩いの場所として現在残されていた。戦場となった韓国ですら、数百年の時を経て、人々の記憶から忘れ去られようとしている。このことから、良くも悪くも過去を踏まえて、互いに理解し合い、新しい未来に向かっての関係を築いていくべきであると考えた。この研究旅行で得た知識及び体験によって、調査を行う過程での考察の裏付けとなる数々の貴重な体験を得られた。

#### -参考文献-

- 崔 官著『文禄・慶長の役—文学に刻まれた戦争』(1994年, 講談社選書メチエ)  
中野等著『文禄・慶長の役』(2008年, 吉川弘文館)  
太田秀春著『近代の古蹟空間と日朝関係—倭城・顕彰・地域社会—』(2008年, 清文堂)  
佐賀県立名護屋城博物館『秀吉と文禄・慶長の役』(2007年, 株式会社 三光)  
鄭 棟柱原著 吳 満編訳『朝鮮のジャンヌダルク 論介』(2002年, 大阪経済法科大学出版部)